新竹商店社長 新竹（あらたけ） 浩子（ひろこ）さん

駅弁に詰める記憶と感動 ②

人間発見

商家育ち、憧れの東京へ ■ 自身の演技みて役者断念

1960年、三重県松阪市の松阪駅前にある駅弁店に生まれた。両親と祖父母に弟4人。大家族だった。

家族総出で仕事する環境に育ちました。幼いころは両親が使っていたソロバンを転がして遊んでいました。学齢期になると、1階の作業場にいる父が「おーい」と上の階の私たちを呼ぶようになりました。弁当にひもを十文字にかける作業を手伝うのです。

駅前の自宅兼店舗から、駅構内の売店に弁当を届けに行きました。駅員にも顔を知られていて「こんにちは。新竹です」といえば改札を顔パスで抜けられます。後に東京に進学したとき、切符がないとホームに入れないことを知って驚いたものです。

会社は先を見る目もあり、69年には国道42号線沿いにドライブインも開きます。ここは伊勢の土産菓子「赤福」も販売していて、高校生になると夏休みに売り子の手伝いもしました。若い女性が店にいると購入する人が増えたそうで、赤福の人から「あんたがおるときにはようけ品物を持ってくるようにするわ」と言われたこともありました。

にぎやかな商家に育ったが、「家から出たい。松阪から出たい」という思いを募らせるようになった。

我が家の大人は私の弟である長男に仕事を継がせたいと思っていることを肌で感じました。駅弁の商売を始めてからの新竹家はなぜか女の子が生まれ、父の代までずっと養子を迎えてきました。祖父に「浩子が男の子だったら」と言われたこともあります。2人目からは男が続いたものの、親は後継者となる長男を甘やかすことが多く、子どもながら不公平に思いました。

地元の県立松阪高校に進学しました。進学校なので、同級生は家計に余裕のある教育熱心な家庭の子が多かったと思います。夏休み明けに学校に行くと、家族で観光に出かけた話を聞かされます。でも我が家は観光の時期こそかき入れ時で、話題に入ることができません。どこにも行けないのはこの家に生まれたからだと思うようになりました。

3年生になり、東京への進学を決意しました。三重の高校生は名古屋か京阪神の大学に進むことが多いのですが、できるだけ親元から遠い大学がいいと思いました。

明治大学文学部への入学が決まり、78年に夢の東京生活が始まった。大学生になったのを機に新しいことに挑戦することにした。

劇団「テアトロ〈海〉」の俳優養成所に入って役者を目指すことにしました。もともと読書好きで、松阪駅前にいくつかあった映画館にもよく出かけました。「ベルサイユのばら」がブームになったときは電車を乗り継いで兵庫県宝塚市の劇場まで出かけたこともあり、演劇への興味が高まっていたのです。

〈海〉は、三島由紀夫の戯曲の演出を手がけた松浦竹夫さんが主宰する劇団で、稽古場は新大久保駅から15分ほど歩いたところにありました。年に数度だけ現れる松浦先生は厳しい方で、褒めてもらったことはありません。「お前たちの情熱はちっとも前に伝わってこない」と言われましたが、そのときは何が足りないのか分かりませんでした。

大学卒業後も演劇を続け、松浦先生の計らいか85年のNHK大河ドラマ「春の波涛」に出演しました。主役の松坂慶子さんに日本舞踊を学ぶ生徒の役でした。祖母に日舞を教わっていたので、松坂さんから「あなた踊りがとてもお上手ね」と褒められました。

放送日が決まり、家族にも連絡し、テレビで自分を見ました。とてもショックを受けました。かつらをつけた自分は演技もぎこちなく、画面にいてはいけない存在に思えました。松浦先生の言葉の意味をようやく実感しました。

そのころ、会社を引っ張ってきた祖父が肺がんで入院しました。家族総出で仕事してきた我が家には一大事です。役者の夢に終止符を打ち、帰ることにしました。7年暮らした笹塚の下宿を引き払い、大学時代の女友達1人に見送られて東京を離れました。

5人きょうだいの長女として生まれた（後列が新竹浩子さん、中学1年生当時）